法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

真鶴 港町の魅力発見とこれからの展望

石渡, 雄士 / ISHIWATA, Yushi / 法政大学大学院, エコ地域デザイン研究所[編]

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院エコ地域デザイン研究所富永譲研究室＋陣内秀信研究室
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
57
(発行年 / Year)
2008-03

charm discovery of port town and view in the future

法政大学大学院エコ地域デザイン研究所
港町再生プロジェクト
富永譲研究室＋陣内秀信研究室

法政大学大学院エコ地域デザイン研究所

港町再生プロジェクト

富永譲研究室＋陣内秀信研究室

はじめに

本報告書は、法政大学富永譲研究室と陣内秀信研究室が 2007 年度に行った、神奈川県足柄下郡真鶴町に関する研究成果をまとめたものである。本研究は、文部科学省学術フロンティア推進事業（学術フロンティア推進事業）の採択を受けて設立された、法政大学大学院エコ地域デザイン研究所での「港町再生プロジェクト」の一環として行われた。

現在、法政大学大学院エコ地域デザイン研究所では、都市と地域の再生のために、主に長い歴史のなかで豊かに育んできた水辺空間に着目して、歴史とエコロジーにもとづいた都市・地域づくりの方法を研究している。その中で、豊かな自然と歴史を持つ真鶴町は、我々にとって探し求めていた町であった。天然の美しい入江を包みこむように斜面地がそびえ、その斜面の上に住宅が密集するこの小さな港町は、日本の港町の持つ原風景の一つであり、全国津々浦々にある港町や漁村の持つ現代的価値やその将来像を考える上でも大きな示唆となるに違いない。

法政大学大学院エコ地域デザイン研究所が真鶴町と関わりを持ち始めたのは、富永研究室が活動を開始した 2004 年からである。富永研究室は、町役場や町民の方々と深く関わり合いながら、町民の視線に立った真鶴町の再生計画を提案するための研究活動を続けている。また、2007 年度からは陣内研究室のメンバーも加わり、歴史と自然環境の視点からのアプローチによる考察が進められている。２つの研究室の連携によって、歴史と自然環境の視点から真鶴町の魅力や価値を見つけ出し、それに基づいた再生計画を提案することが本プロジェクトの目標である。

2007 年度は、２つの研究室が共同で活動した初年度にあたる。初年度ということもあり、今年度はお互いの研究室の個性や特徴を理解することに重点を置き、活動は共同で行いながら、各研究室の個性を充分に発揮した成果を出すことを目標とした。その成果をまとめたのが、本報告書である。来年度は２つの研究室がより連携を図りながら、最終成果へとつなげていきたい。

なお、現地での活動・調査では多くの方のお世話になった。真鶴町まちづくり課の岩本幹彦氏、卜部直也氏、多田英高氏には、商工祭りをはじめ真鶴町での活動に誘って頂き、大変お世話になった。真鶴町まちづくりの会海緑鳥代表の平井宏典氏にも、真鶴町の活動や暮らしについてアドバイスや協力を頂いた。東海大学工学部建築学科加藤仁美教授には、ヒアリング調査に誘って頂き、また、加藤仁美研究室のゼミ生には、共同で行った商工祭りにおいて、研究成果をパネルにまとめて発表をして頂いた。岡本哲志都市建築研究所代表の岡本哲志氏には、港町の視点から真鶴を読み解く研究方法をアドバイスして頂いた。（株）ケイ・プランナー代表取締役の川端直志氏には、ご多忙の中、貴船祭りに来て下さり、真鶴町の再生についての貴重なご意見を頂いた。ここに、心からの感謝を申し上げる。

法政大学大学院　エコ地域デザイン研究所
富永　譲
石渡雄士

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第１章　真鶴再生計画　（富永讓研究室　今井暢子　宮下幸多）・・・・・6

大屋根計画　- マチの賑わいを生み出す装置として -

GALLERY MANAZURU　～真鶴の魅力　これからのまちづくりに向けて～

真鶴再生計画　商工祭り

第２章　港町として見た真鶴町の価値と魅力

（陣内秀信研究室　石渡雄士　一原秀　佐野友彦）・・・２６

真鶴の魅力とは　ー他の港町との比較研究ー

真鶴・港町 MAP

真鶴町デザインサーベイ

真鶴（神奈川県）とポルトフィーノ（イタリア）　～入江を持つ港町～

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５１
報告書作成メンバー・真鶴商工祭り協力者・・・５３
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４

第一章

真鶴町再生計画

大屋根計画　- マチの賑わいを生み出す装置として -

GALLERY MANAZURU　- 真鶴の魅力　これからのまちづくりに向けて -

富永研究室　修士２年　今井暢子　宮下幸多

大屋根計画

－ マチの賑わいを生み出す装置として －

この町は特有の地形を成している
各々の家からは港（海）が眺められ、風も気持ちよく吹き抜けていく
それこそ真鶴らしさであり、この土地の美である

大屋根はその特徴ある地形の上に覆いかぶさり人々の憩いの場を生む
屋根の隙間から光が差し込み、風が流れる
その隙間からは真鶴の魅力的なシーン（風景）が垣間見え、一つの芸術作品として屋根に描かれる

”ひとつ屋根の下で”

町中に散りばめられた大屋根
人々の集う場
そこには自然と真鶴の魅力が集まる

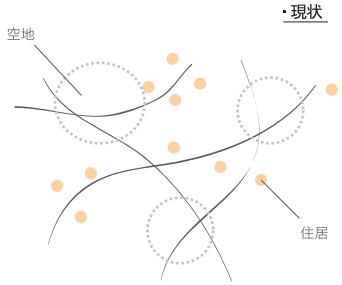
■　社会状況、提案へのきっかけ

昔から石材の産地として活気あふれる町並みを築いていた真鶴町。その人情は受け継がれ、貴船祭りを中心としたお祭りが年に数回行われるなど、住んでいる人々はこの町に愛着を持っている。このように人も街もとても魅力的な場所である

しかし、近年では若い人々は皆、都心に出てしまい、現代の地方都市の特徴とも言える状況が真鶴でも起こっている。
そこで真鶴の住民や役場の人々は新たに町の活性化と観光化を図るため、美の条例という町の景観を売りとしたものを発表したり、地域住民を対象としたイベントも行っている。
そうした中、建築的視点から何か解決の糸口が見つからないかと考え、この大屋根計画を立案した。
外部の人よりもまずはそこに住む人たちの生活や環境を豊かにし、人々が気軽に集まれ、新たなつながりを生み、再度真鶴の魅力を認識できる、そんな住民たちの意識を結ぶやわらかな広場を提案する。

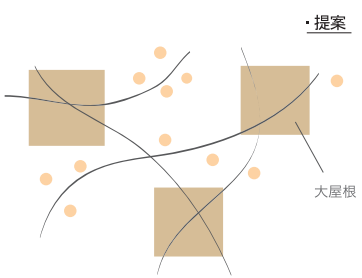
■　都市環境

イタリアのポルトフィーノによく似た港でコの字型になっている。さらに石材が取れる山が隣接することから地形は複雑に起伏し、蛇行した路地が通る。



複雑な地形とそれに沿うように細い路地があり、魅力的な空間を生み出している

しかし、そこには人々の集まる場がない



その地形をそのまま残し、空地を利用して大屋根をかける
屋根の下に新たな場が生まれ、人々のコミュニティの場として利用される

ある地区の空地の模様。モノが錯乱して置かれ、誰のスペースでもなく無駄な空間となってしまっている。

その空間に屋根をかけ、床面を整備することで人の賑わう場へと再生させる。既存で使われていた路地空間も屋根をかけたことで人々の行為が生み出される場となる。

■　敷地選定

今回、設計を行う場所を港の東側に位置する日和山付近の複雑な急斜面に設定する。約１２mの高低差があり、様々な面をつなぐように階段が蛇行する。また、聳え立つ壁の壁面はすべて小松石で覆われ、その隙間からは植物が生い茂る。まさに真鶴の特長とも言える場所である。

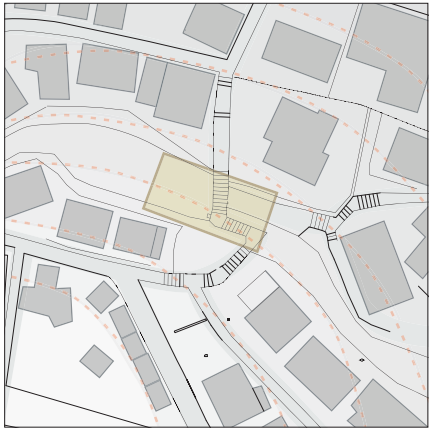
下から敷地を見上げる。階段が蛇行して上る。

上から港を眺望。湾全体が見渡せる。

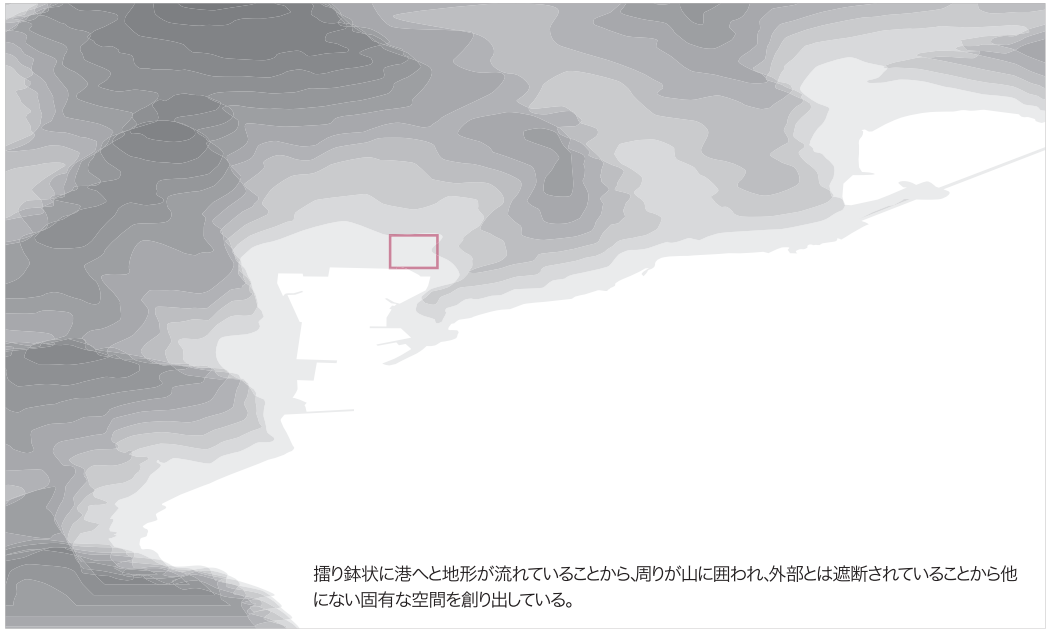
航空写真。港から北側に位置する日和山付近を敷地とする。

■　ルール

真鶴の住宅郡はある秩序をなして形成されている。港を中心に同心円状に展開するそのルールは地形に逆らわず、風向きが考慮されている。さらにこのことからすべての家の窓からは港（海）が望められる。このルールを元に屋根の向き、開口の位置、風を取り入れる素材などを決定する。



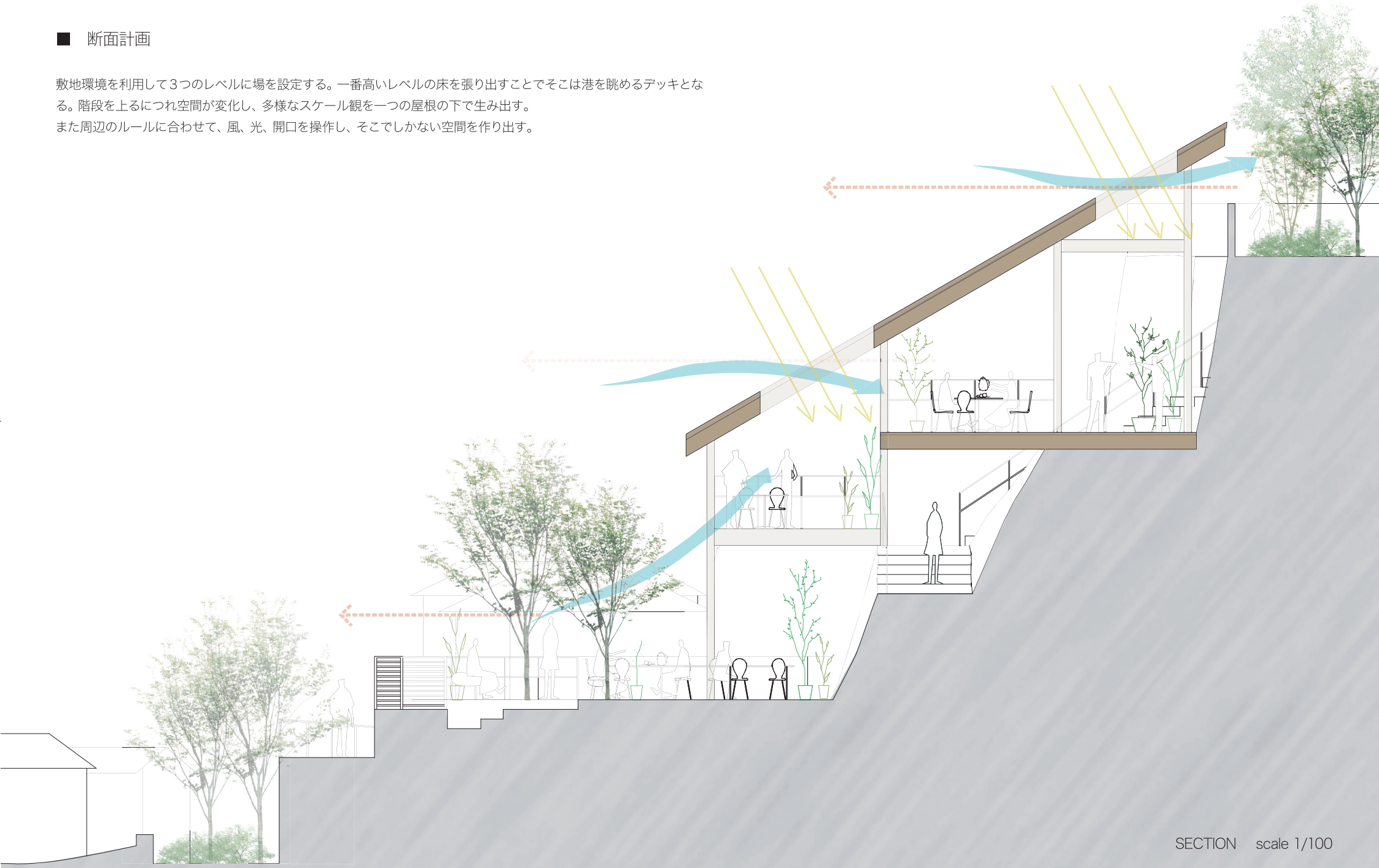
建物の方向性の規則を示した図。それぞれの建物が港を向き、地形に逆らうことなく配列している。



擂り鉢状に港へと地形が流れていることから、周りが山に囲われ、外部とは遮断されていることから他にない固有な空間を創り出している。

■ 断面計画

敷地環境を利用して３つのレベルに場を設定する。一番高いレベルの床を張り出すことでそこは港を眺めるデッキとなる。階段を上るにつれ空間が変化し、多様なスケール観を一つの屋根の下で生み出す。
また周辺のルールに合わせて、風、光、開口を操作し、そこでしかない空間を作り出す。

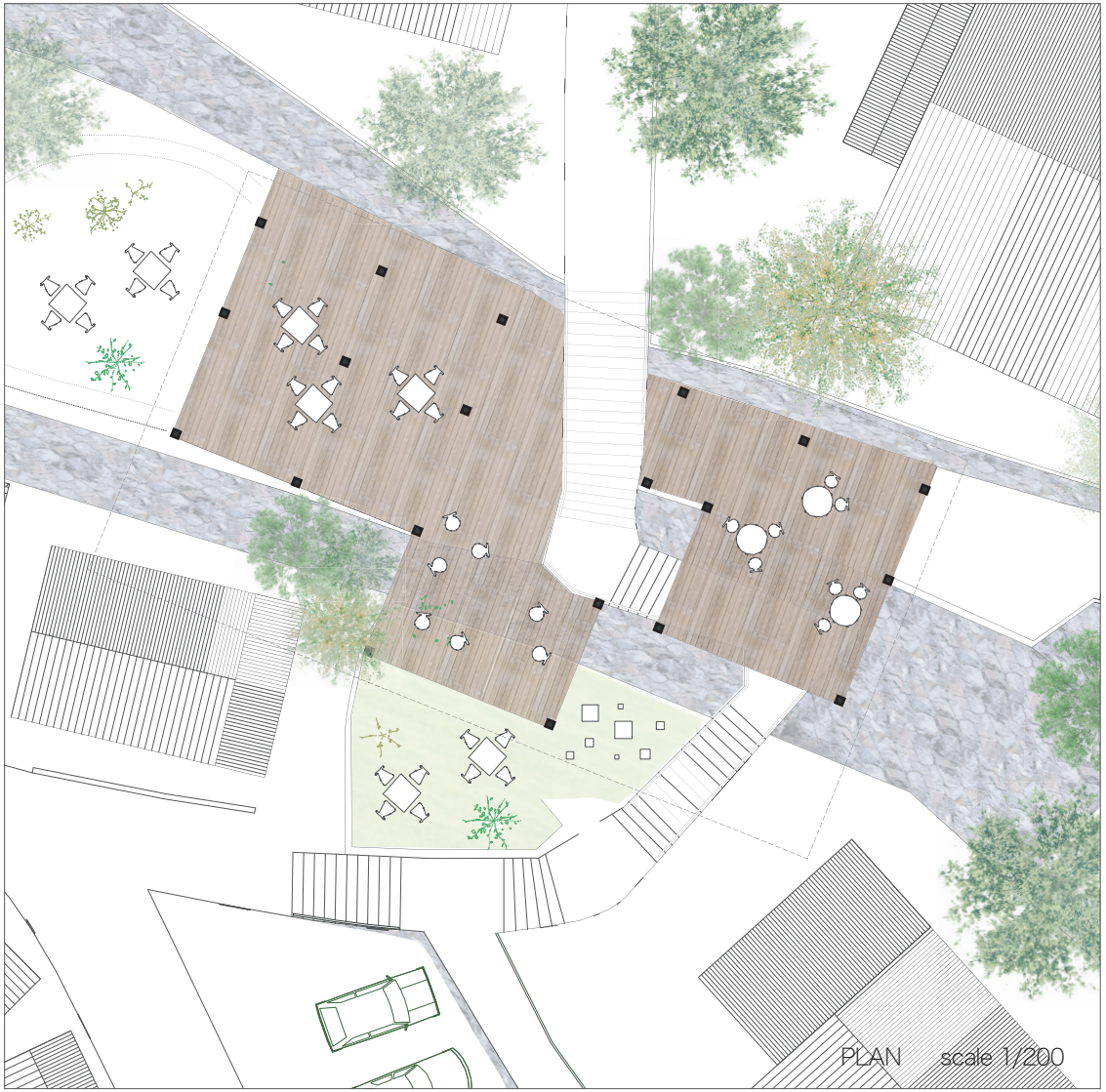


SECTION　scale 1/100

■　平面計画

床にデッキを張り空間を規定する。左側の空地では多くの人が集まれるスペースとして右の狭い道の上には床を張り出すことで場を作り出す。階段や通路を通り抜ける間に自然に内部へと流れ込む。

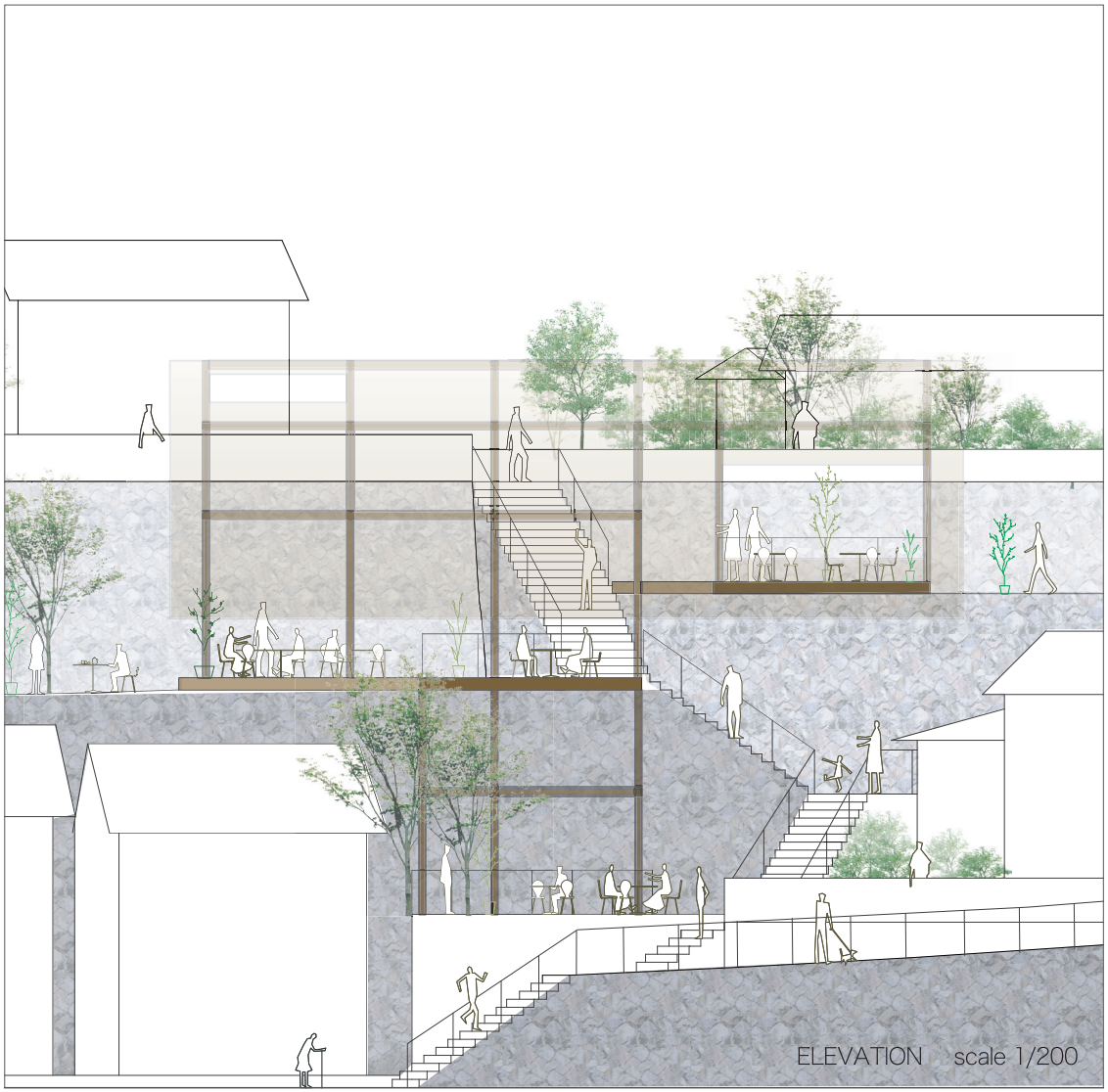
上から張り出したテラスを望む。お茶を飲みながら港を眺める。



■　立面計画

四角形の単純な屋根の下だが、床レベルが自然と変化することで多様な空間体験を演出する。壁面はすべて小松石という真鶴特有の石で覆われており、さらに視線の先には港を眺められる。床、壁、屋根に真鶴の特徴が表れることになる。

下から大屋根を眺める。人々の行為が隙間から垣間見え、賑わいをみせる。



真鶴の魅力、それは決して人工的には造ることはできない自然の中で生まれたものである

この屋根の下に入ったとき、人々はもう一度その魅力に気づく
さらに住民同士もこの場を互いに共有することでより深い関係を築ける
そんな人とまちをつなぐ結び目としてこの屋根を提案する

GALLERY　MANAZURU

～真鶴の魅力　これからのまちづくりに向けて～

concept

真鶴に住む人々、また他の近隣地域から訪れた人々に私たちが真鶴を知るために調査してきたことを発表することで、真鶴という町をより知ってもらうこと

法政大学の研究室が真鶴という町に対して、どのような研究をし、どのようにまちづくりについて考えているのかを真鶴に住んでいる町の人に知ってもらい、今後のまちづくりに対して、町民や私たちもとっても何かきっかけをつくりたい

商工祭り

本年度も、真鶴港みなとまちづくり協議会にオブザーバーとして参加しているほか、真鶴で開かれる祭りなどの地域活動に積極的に参加した。その祭りの一つに商工祭りがある。

昨年度は研究発表・パネル展示および「小松石カフェ」、小松石を用いたインスタレーションを企画した。小松石は真鶴を代表する産業の一つであるが、そのことはあまり知られていない。真鶴の魅力の一つである小松石を多くの人に知ってもらうために、真鶴町役場および神奈川県石材協同組合の協力を得て、小松石の展示を実現した。

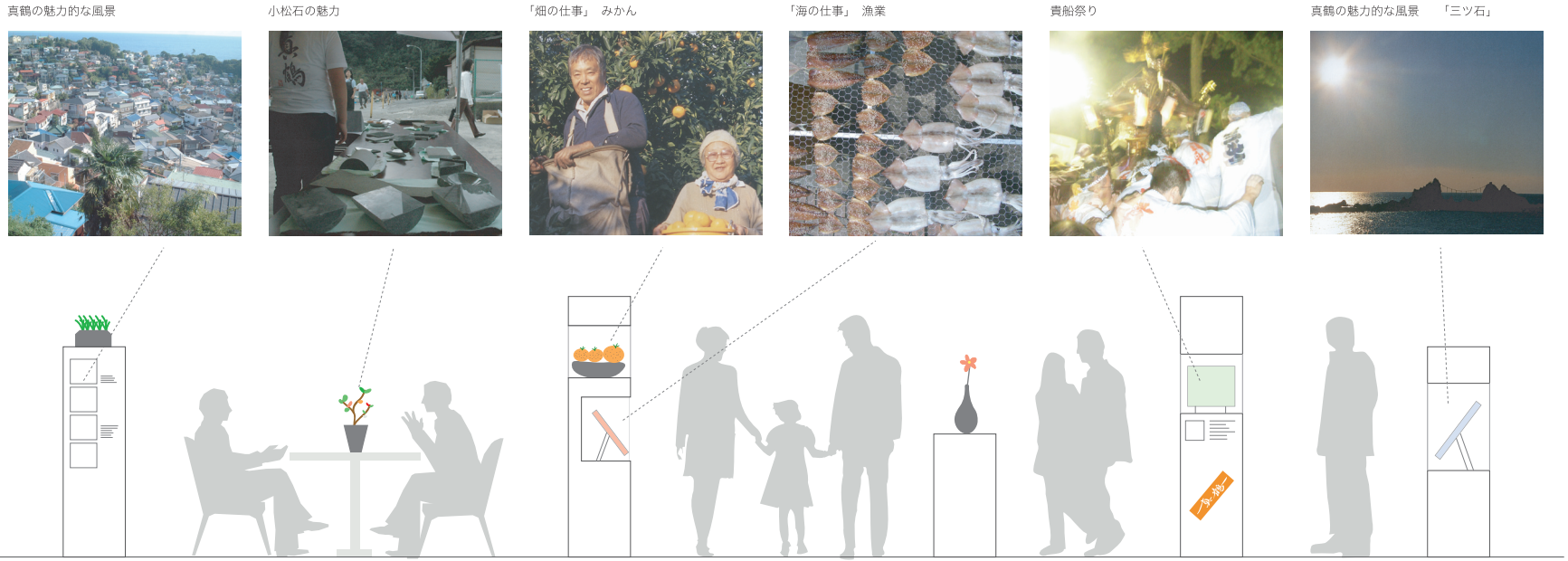
本年度は富永研究室の他に、陣内研究室、加藤研究室（東海大学）が加わり研究にも深みが出てきた。専門性の異なる研究室がそれぞれのアプローチで街づくりに対して取り組み、改めて「美の条例」を意識し「真鶴らしさ」につながる町の魅力を研究した。

本年度の商工祭りではカフェの出店、真鶴手ぬぐい（自主制作）の販売で真鶴町民とコミュニケーションをとり、さらにまちづくりにより関心をもってもらうために我々の調査・研究・提案をアクリル模型・提案模型・パネルにて展示した。そしてこの商工祭りが町民にも私たちにも、これからの真鶴のまちづくりにつながるきっかけとなる場を望んで企画した。

真鶴らしさが埋め込まれた柱

真鶴には魅力ある多くの風景や産物が存在している。それらは他と類似しない、まさに”真鶴らしさ”といえる。
それらを訪れた人々に伝える装置としてこの柱に埋め込む。

この柱は模型、パネルとも関係付けられる。
いくつかの高さに表現された柱が会場全体に散りばめられ、展示空間を彩る。
この装置によって真鶴をテーマに様々なコミュニケーションが生まれることを願う。

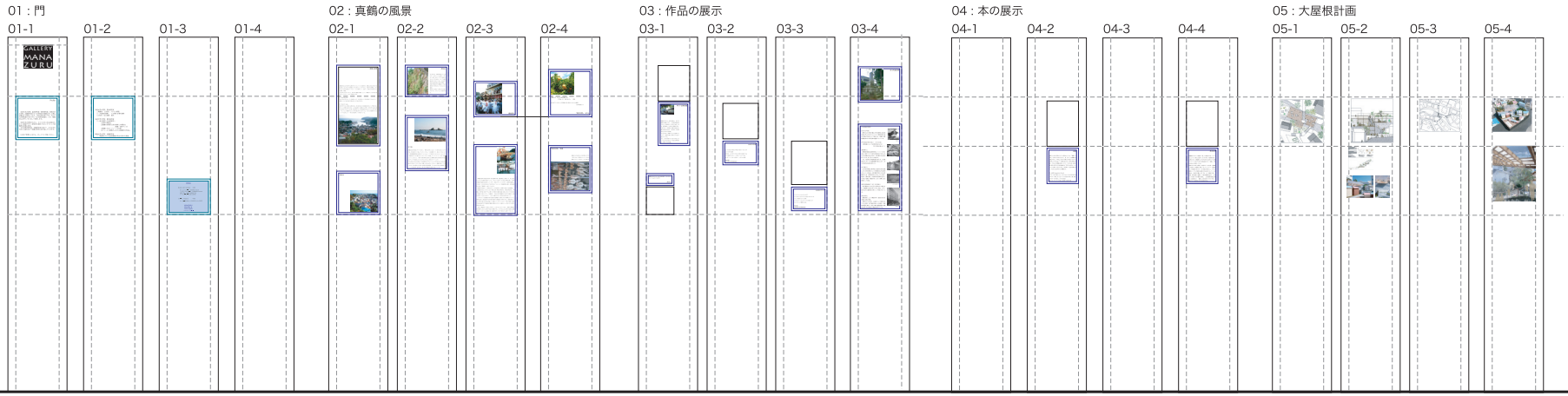


断面計画

柱の展示

３つの研究室のそれぞれの研究成果を、柱を配置することで展示空間をつくった。柱は動線を導き、また、たまりの空間を演出する。各々の柱には「真鶴らしさ」が散りばめられている。

01. 自己紹介・コンセプト
02. 真鶴の美しい風景
03. 小松石の魅力
04. 真鶴に関する書籍（小説）
05. 真鶴まちづくり提案



３つの研究室紹介

□法政大学大学院　富永譲研究室

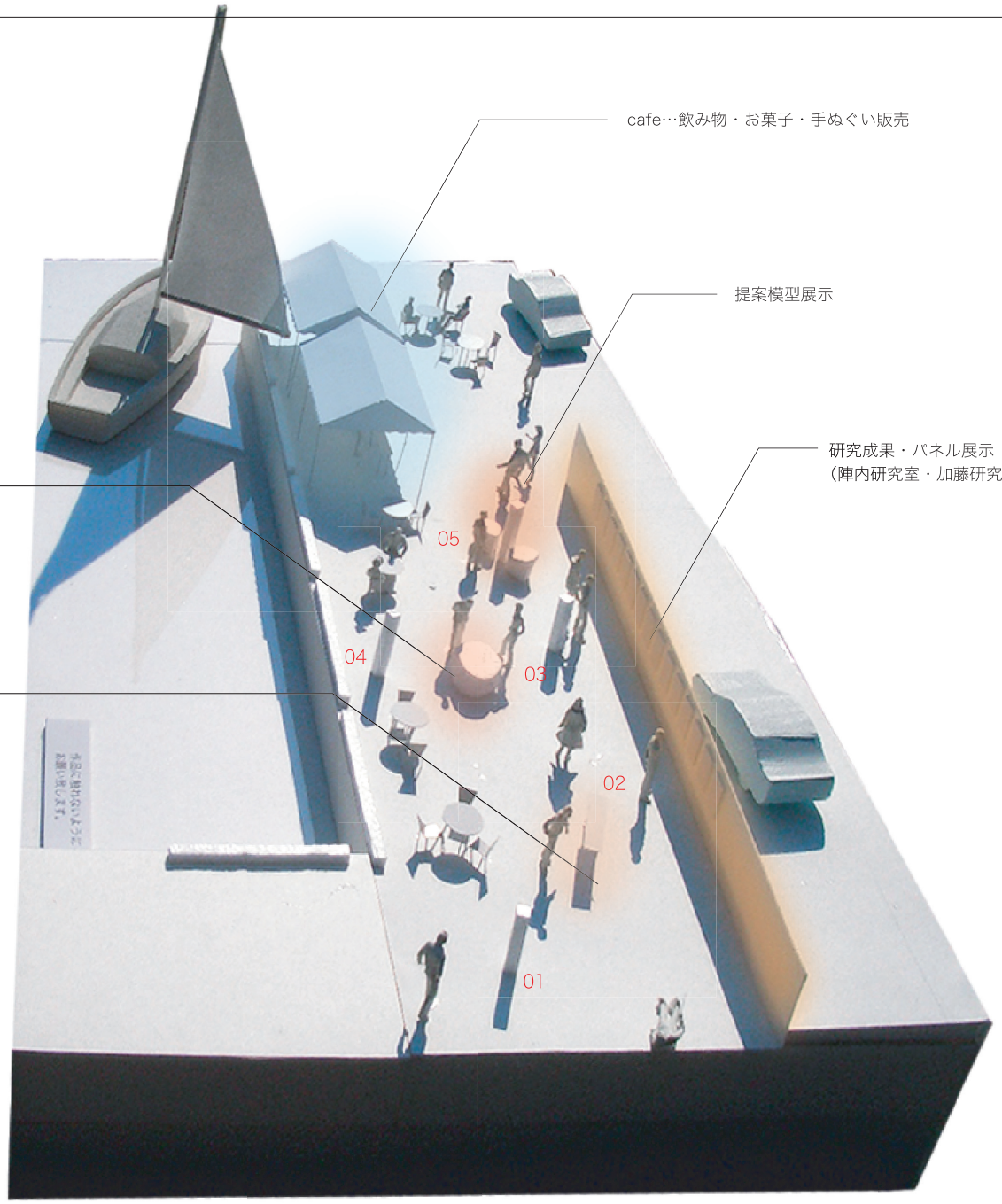
建築意匠の分野から真鶴再生計画に取り組んでいる。
今回の商工祭りでは、真鶴町に「大屋根計画」を提案。
また真鶴らしさとなるものをまちの人にも改めて感じてもらえるような展示を行った。（石業として小松石や、漁業、みかん、中川一政美術館、間知石 etc…）
真鶴港の縮尺 1/3000 のアクリル模型も展示。そのアクリルのインパクトは大きく、それをきっかけに様々な真鶴町民とコミュニケーションをとった。
また「真鶴てぬぐい」を作成し販売。

□法政大学大学院　陣内秀信研究室

建築史・都市史の分野から真鶴再生計画に取り組んで いる。港町の研究をし、真鶴港がどの位置であるかということやフィールド調査からわかる真鶴の町並みを研究。「美の基準」や「真鶴らしさ」というものの裏づけするようなことを調査･研究を重ね、パネルにて展示を行った。

□東海大学大学院　加藤仁美研究室

都市計画史の分野から真鶴町を研究。
都市の実態とその背景にある法制度との関わりを歴史的に解明する研究を主に行っている。
「真鶴町における路地景観の保全に関する調査」をパネルにて展示を行った。



■　商工祭り　真鶴手ぬぐい製作・販売

1

2

3

4

5

6

☐　Image & Photos

1　原画
2　真鶴港と真鶴手ぬぐい
3　手ぬぐい販売風景
4　祭りを楽しむ子供達
5　真鶴手ぬぐいを着ける囃子隊
6　同上

☐　真鶴手ぬぐい製作のキッカケ

７月２６～２８日に開催された真鶴伝統の祭り「貴船祭り」では、選ばれた人しか担げない本御輿、真鶴の若い人達だけで担ぐ同年会御輿、真鶴役場の職員と希望者が担ぐ役場御輿、の３つの御輿が真鶴町を練り歩く。担ぐ人達は皆揃って背中に「真鶴」の文字が入った法被を着ている。ただ、頭や帯、腕などに巻いている手ぬぐいは個人の持つ手ぬぐいだった。

☐　Design Concept

貴船祭りの時に担ぎ手、見物人、皆揃って真鶴手ぬぐいを身に着けることで、貴船祭りの、そして「真鶴」の団結力をより強くできないかと考えた。さらに、短手約３６ｃｍ、長手約１００ｃｍの手ぬぐいの手軽さと便利さにより真鶴町民の日常生活にも密接に関係を持ちたいと考えた。

☐　Letter

静かで穏やかな、そしてどこか特別な雰囲気を持つ真鶴。その真鶴に住む人達の姿を思い浮かべながら、これからの真鶴の成長を願い、「真鶴」が優雅に、力強く、今にも飛び立とうとするその瞬間を表現した。

☐　Color

真鶴と言えば、まず海と自然を想起する。真鶴町民に真鶴のから連想する色を聞くと、多くの人が海の色である青や藍色を連想させた。文字同様、真鶴の更なる飛躍を願い、海の色である青色の補色関係にある橙色を手ぬぐいの色彩に決定した。染めによる仕上げにより使っていくうちにその色彩は変化していく。

橙色　・・・　活動的で軽快で成熟したイメージを持つ。
自然で直情的な陽気さを表し、
自信や勇気、朗らかさ、自発性、積極的な姿勢だけでなく、
健康や活力、創造力と喜びをもたらす。
コミュニケーション、行動、冒険を表す。

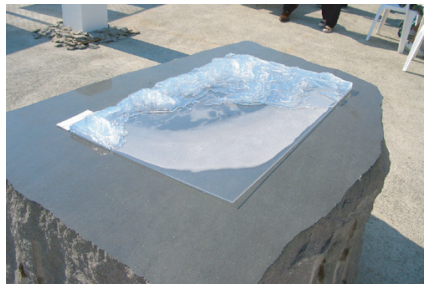
1

2

3

4

5



6

7

8

☐ Photos

1　全体風景

2　カフェメニュー

3　柱

4　大屋根計画提案模型

5　全体レイアウト模型

6　アクリル模型

7　小松石 - 加工過程 -

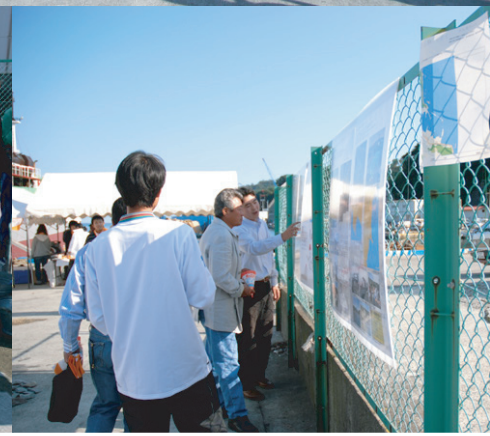
8　パネル展示

□ Photo 準備・製作・当日風景

自離学保存会

真鶴

神奈川県真鶴町
第三新陽



第二章

港町として見た真鶴町の価値と魅力

真鶴の魅力とは　-他の港町との比較研究-

真鶴・港町MAP

真鶴町デザインサーベイ

真鶴（神奈川県）とポルトフィーノ（イタリア）-入江を持つ港町-

陣内研究室　石渡雄士　一原秀　佐野友彦

真鶴の魅力とは　ー他の港町との比較研究ー

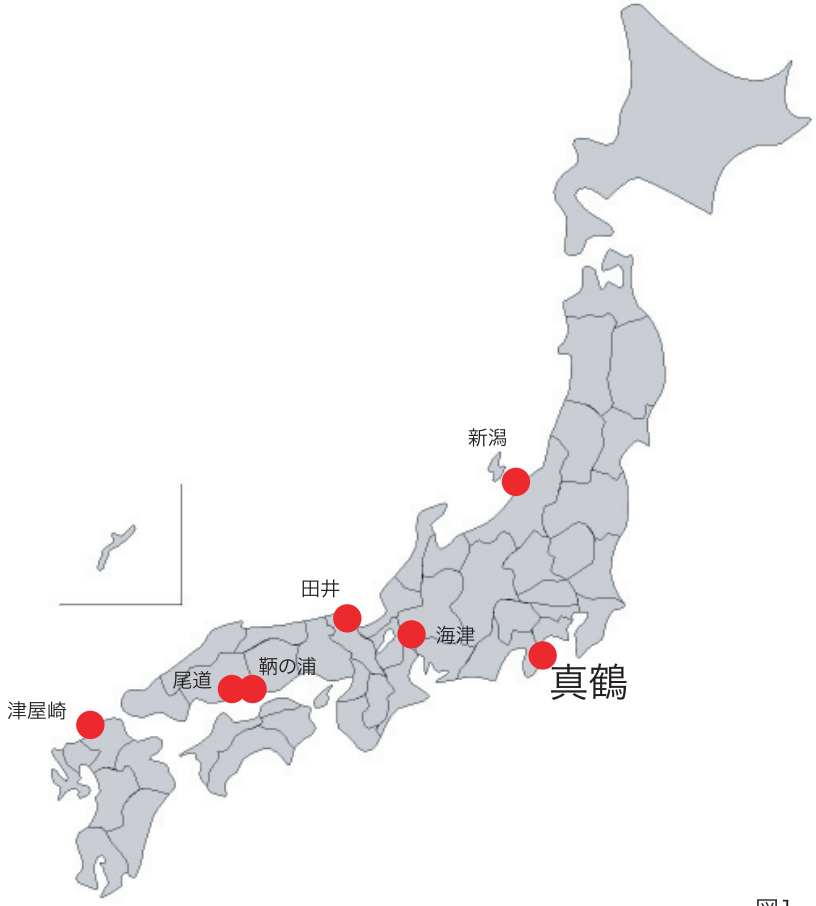
◎真鶴の魅力を探るために、まず全国の港町との比較分析を以下の方法で行った。

○港町の類型化（担当：佐野・石渡）
○真鶴の各スポットと他の港町の類似点（担当：佐野・石渡）
○フィールド調査から分かる真鶴町の街並み　（担当：石渡・一原・佐野）
○ポルトフィーノと真鶴の比較（担当：石渡）

→ 日本の港町における真鶴の位置づけとその特徴を明らかにする。

それにより、真鶴にどのような魅力・再生方法があるのかを模索する。

☆対象とした全国の港町の位置



①新潟(日本海)
②海津(琵琶湖周辺)
③田井(日本海)
④鞆の浦(瀬戸内海)
⑤尾道(瀬戸内海)
⑥津屋崎(日本海・九州)

図1.　6つの港町の位置

☆港町類型化

日本の港町は、地形条件で分類すると３つのタイプに分けられる。

・入り江型（真鶴）　・前島型　・河川型

それぞれの特徴としては・・・

↓

図2.　鞆（前島＋入江型）

図3.　真鶴（岬＋入江型）

図4.　庵治（前島型）

図5.　三国（河川型）

○・・・港町の場所

明治大正日本五万分の一地図集成より

コラム①
ー地形条件による港町の特徴ー

日本の港町の地形的な特徴として、大きく３つのタイプがある。緩やかな入江の海岸線に沿った港町（入り江型）、緩やかな海岸線近くに前島を持つ港町（前島型）、大河川河口近くの河岸線に沿った港町（河川型）である。

瀬戸内海沿岸の港町は、入り江型と前島型が多い。入り江型は、三方を山に囲われることで港に吹く風を防ぐ天然の良港として栄えた。前島型は、港町近くの海上に島（前島）を持ち、その存在が強い波や風を和らげ、船の停泊がしやすい環境をつくり出している。

河川型は、日本海沿岸や太平洋沿岸に多く見られる港町である。海と河の結節点であることから舟運が栄えた港町が多い。また、江戸時代には河川の上流に城下町が建設されると、河口の港町が物流の拠点として繁栄した。

写真1.　真鶴港

真鶴・港町MAP

キーワード：海からの視点
日和山
石垣・坂・宅地
砂浜
石切り舟・港
貴船神社

真鶴・港町MAPは、真鶴と他の港町の風景をいくつかのキーワードから比較することで港町の特徴を分析した。
分析から、普段何気なく見ている真鶴の町が港町としてどのような特徴を持っているのかが見えてくる。
この分析をすることで、真鶴にしかない魅力・「真鶴らしさ」を探すきっかけになるのではないかと考える。

図6.　真鶴港町MAP
yahoo地図より

●海側から見える寺・墓地・・・　多くの港町は斜面地に形成されており、その下層部分に人が生活・活動する場、上層部分に寺・墓地が形成されていた。しかし、現在では海沿いには高層ビル・リゾートマンションが建ち並び、その風景を見ることはなかなかできなくなっている。しかし、比較対照とした鞆の浦では、船から町を見るとその原風景がそのまま残っている。この残っているということが、現在では貴重な財産なのだ。真鶴では、美の条例により、高層ビルの規制をすることでその景観を保っている。(比較：全国地図④　鞆の浦)

写真

左；鞆の浦　海側からの視点（写真2）

右：真鶴　　海側からの視点（写真3）

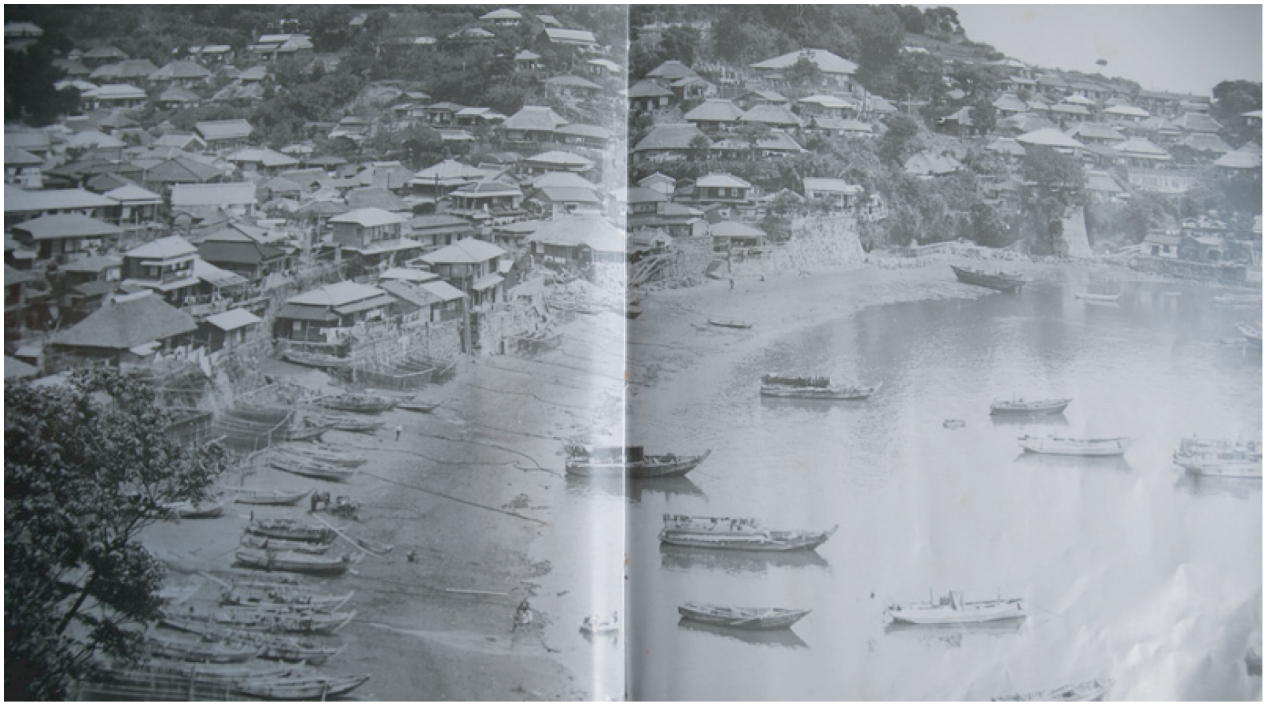
●港から神社までの道・・・　中世の港町は、水際線から垂直な道を通すことで物資の運搬を行っていたパターンが多い。その中で重要な道のアイストップには、神社やお寺が置かれることが非常に多い。中世に置かれた津島神社も海から伸びた道のアイストップに置かれている。この道の港側は、埋め立て前は砂浜であった。また、津島神社は町の土地神であるということも住民の方から伺った。神社とこの道は真鶴に住んでいる人々にとって、非常に重要な場所であったと考えられる。また、成立年代も鎌倉時代であり、貴船神社に次ぐ歴史ある神社ということからも推測できる。(比較：全国地図③　田井)

写真

左；田井　海側から神社を見る（写真4）

右：真鶴　海側から津島神社を見る（写真5）

●護岸・砂浜・・・　護岸整備前の真鶴は砂浜のある漁村であった。現在の港からはその姿は想像できないが、昔は船を砂浜に乗り出して泊めていた。この風景と似同じ風景が残っている町が日本にはまだ多くある。例えば、漁村としての風景を現在も残している田井という場所である。真鶴と同じように綺麗な入江を持つ所である。ここには、舟屋と呼ばれる一階部分に船を置く建物群が砂浜沿いに建ち並んでいる。真鶴にはこうした舟屋があったかは、確認されていないが、日本海という潮位の変動が少ない場所だからこそ出来る建物の形態である。(比較：全国地図③　田井)



写真

上左：田井　砂浜沿いの風景（写真6）
上右：田井　舟屋を見る（写真7）
　下：真鶴　護岸整備前の全体絵（写真8）

『昨日の道　去年の道　大正の写真師が見た
小田原・箱根・真鶴・湯河原・熱海』より

●石切り船・港・・・　各港には必ず船を停泊させる場所が必要である。昭和以前は護岸整備がそれほど進んでおらず、特に漁村では砂浜に小舟を乗り上げて船を停めることも多かった。しかし、現在までその形を残している場所は少なく、コンクリート護岸になってしまっている場所がほとんどである。その中で、雁木と呼ばれる護岸が鞆の浦では残っている。コンクリートと比べ、雁木の階段上になっている護岸は、潮位差のある場所に適した形態であり、昔ながらの魅力を感じる。真鶴でも、木製ではないものの入り江には左右に護岸が残っており、現在では貴重な歴史遺産であるのではないか。(比較：全国地図④　鞆の浦)

写真

左；鞆の浦　雁木と周辺風景（写真9）
右：真鶴　　護岸と周辺風景（写真10）

●石垣・坂・宅地・・・　港町は風などの影響を防ぐため、傾斜のある場所に港をつくることが多い。その傾斜に対して造成をする時は、石垣を設ける例が多く真鶴でもよく見かける。尾道は石灰岩を資材にして、石垣を作っている。真鶴でも、昔は小松石を使って石垣を作っていた。その跡は今でも随所に残っている。また、主要な道が合流する重要な場所には、良い格式の家があることが多く、井戸や祠などが残っていることが多い。(比較：全国地図⑤　尾道)

写真

上左：尾道の造成された土地（写真11）　下左：真鶴の現在の石切り場（写真14）

上中：尾道の住宅内の井戸と祠（写真12）　下中：真鶴の造成された土地（写真15）

上右：尾道・上から海を望む（写真13）　下右：真鶴に残る石垣（写真16）

●海沿いの石垣・・・　護岸整備をする前は、真鶴の海際は石垣であった。台風や地震による高波に対して、背の高い石垣・または防波堤を備えているのが真鶴をはじめ、太平洋・瀬戸内海の港町の特徴である。それに対し、海津では、琵琶湖に面した港町であることから波がほとんどないため、砂浜に石垣を築いているが、石垣の高さが非常に低くつくられているのが写真から見て取れる。(比較：全国地図②　海津)

写真17,18.　水際に残る海津の低い石垣

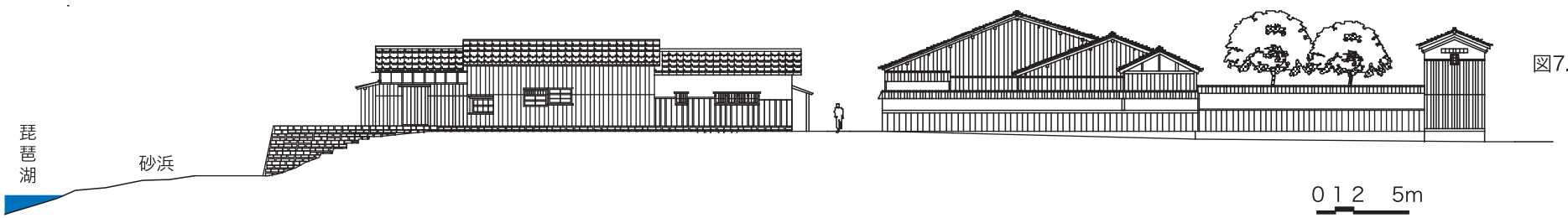


図7.　海津立面図

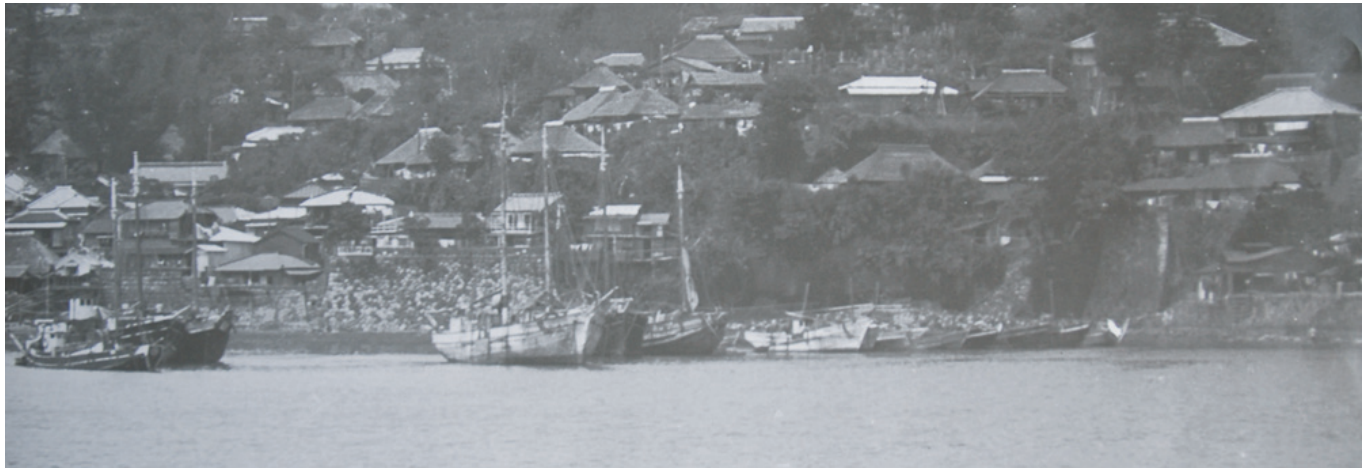


写真19.　護岸整備前の真鶴の海際の石垣

『昨日の道　去年の道　大正の写真師が見た
小田原・箱根・真鶴・湯河原・熱海』より

貴船神社・・・

貴船神社は８８９年に創設されたといわれる真鶴最古の神社である。明治時代までは、大階段の下に置かれていたが、廃仏毀釈により合祀されたために現在の大階段を上がった場所に設置された。

貴船神社の位置は、集落から海を隔てた場所に置かれている。これは、聖と俗(聖なる空間と人々が日常暮らす空間)を分けるという考え方での配置ではないかと思われる。このような聖と俗の関係を持つ港町は、古代から繁栄した津屋崎でも同じような配置がされている。

階段の上から見える街の景色は、是非見ておきたい風景の一つである。(比較：全国地図⑥津屋崎)

左上；貴船神社の階段を駆け上る神輿（写真20）

中上：貴船祭りスケッチ（画：永野尚吾）

右上；駅前での鹿島踊り（写真21）

左下；魂の入れ替えをする神輿（写真22）

中下：禊ぎをする神輿（写真23）

右下：入御で押し合う神輿（写真24）

写真25.　貴船神社正面

写真26.　貴船神社(明治時代)　妻木氏所蔵写真

写真27.　貴船神社から港を見る

写真28.　貴船神社を見上げる

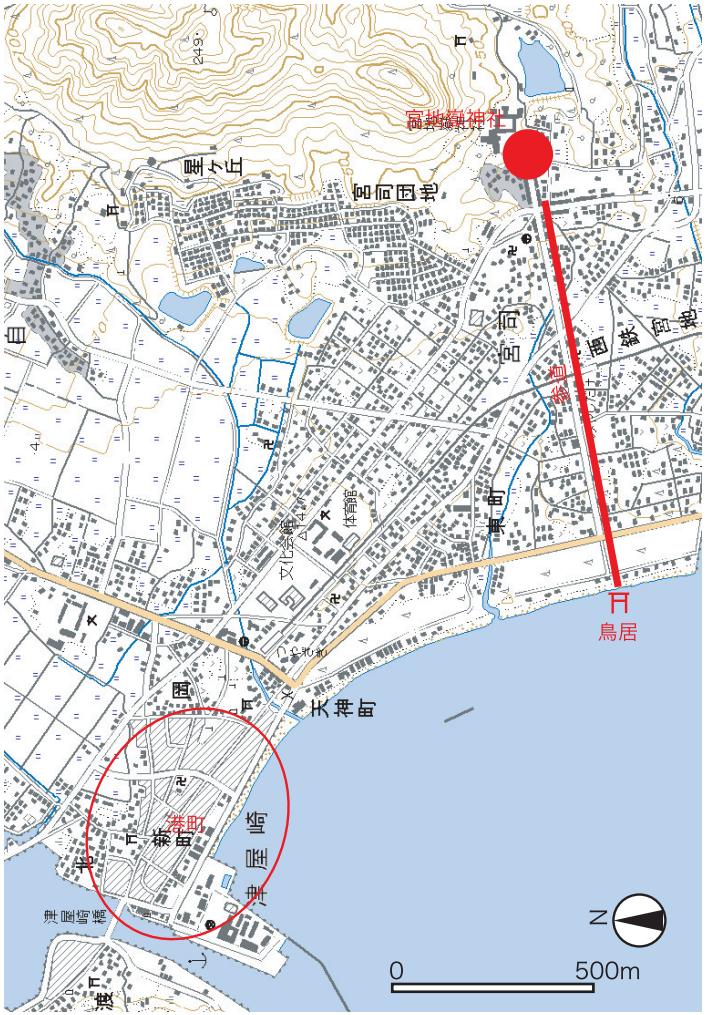


図8.　津屋崎　神社と港町の位置関係
「国土地理院地図閲覧サービス」より

●日和山・・・　港町には多くみられる山で、ここから海を見て、潮の流れや天候を見る場所であった。現在はその役割を失いつつがるが、海全体を見渡すせる見晴らしの良い場所である。真鶴では、地元の人にしか分からないような細い路地を通り抜け、急に視界が広がった場所が日和山である。頂上に立つと、眼下には相模湾が一望でき、風が通る非常に気持ちがいい場所であった。(比較：全国地図①　新潟)

・新潟の日和山　（写真29～31）

日和山へ向かう道

中央に見える階段を上ると・・・　神社・祠がある

日和山からの景色

・真鶴の日和山写真　（写真32～34）

◎真鶴町デザインサーベイ

☆5つのハード

住宅計画をする上で柱となる5つの要素として、造成・施設の種類・外構・施設の種類・施設内部の図面がある。この5つの要素は同時に、ある地域・地区における住宅の特徴を分析する上でも活用できる。

以下の5つがその要素となる。

①造成・・・・・・・住宅用地にするために地面を整備する方法（石垣など）

②施設の種類・・・・母屋・倉・作業場・屋敷神

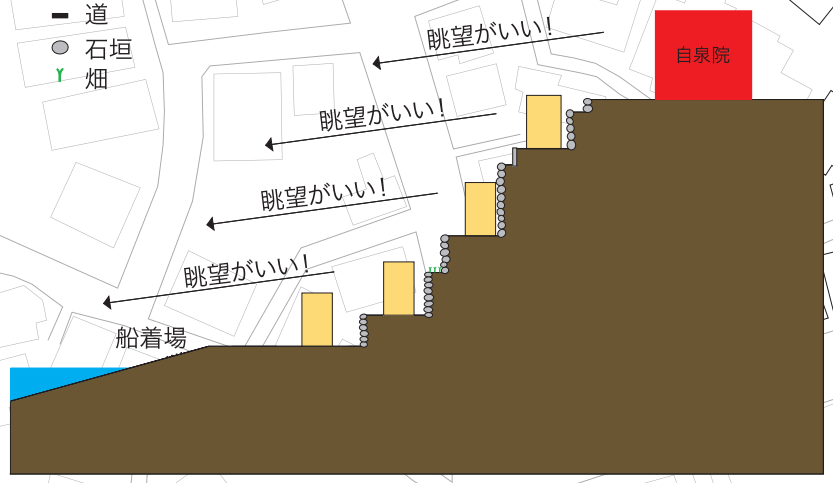
③外構・・・・・・・敷地境界線のしつらえ（石垣・植栽・垣根・コンクリート塀など）

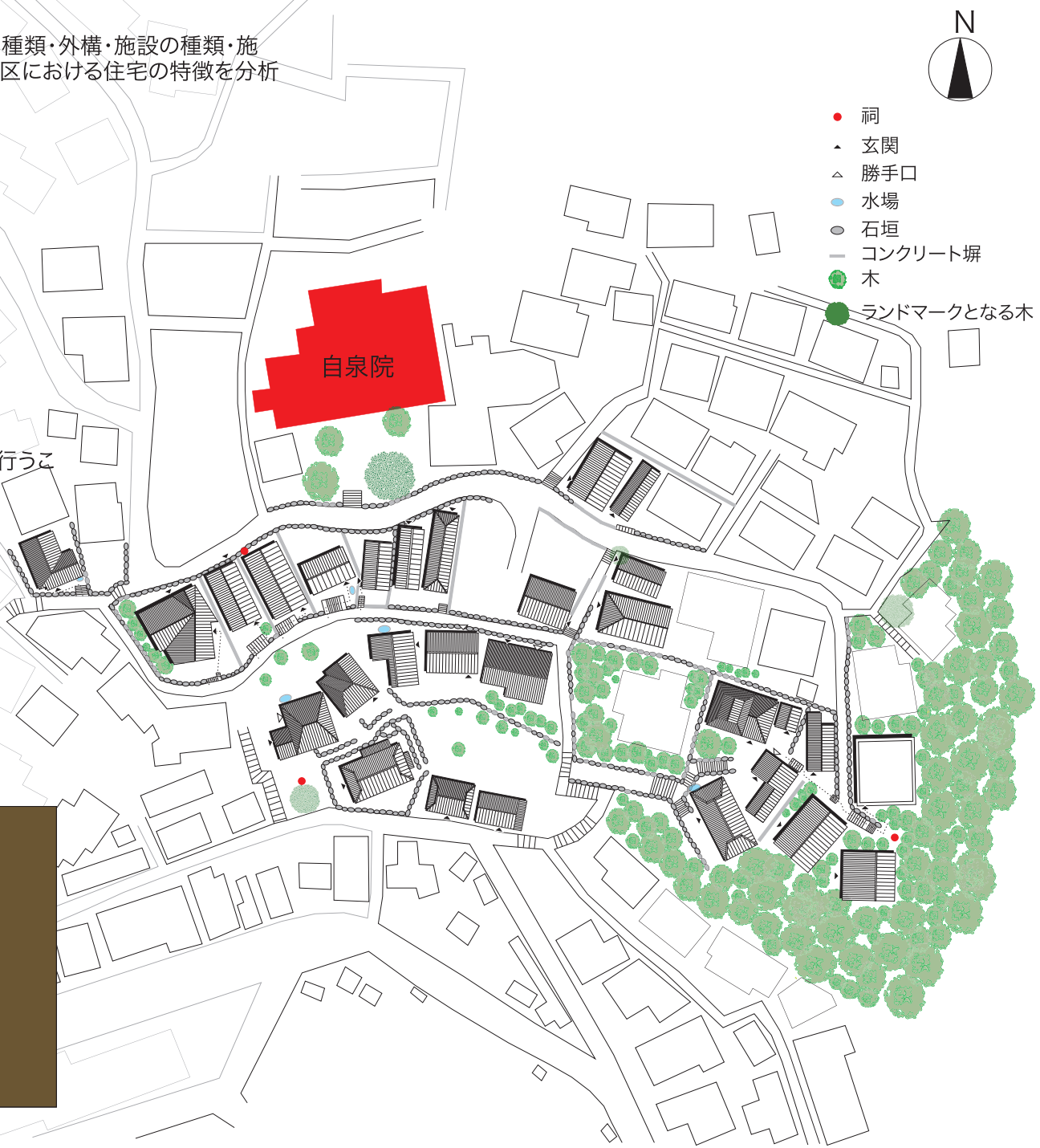
④施設の配置・・・・敷地内における施設の配置

⑤施設内部の図面・・施設の平面図・断面図・立面図

今回は施設内部の図面を除く、4つの要素に着目して調査を行うことで真鶴の現状における住宅の特徴を分析した。

図9.　断面イメージ図





真鶴（神奈川県）とポルトフィーノ（イタリア） ～入り江を持つ港町～

真鶴とポルトフィーノは、古くから港町として栄えた町である。真鶴は鎌倉幕府が開府された12世紀後半には小松石の積み出し港として利用されていた。ポルトフィーノにおいても、ローマ時代から人が住み始め、ジェノバ共和国時代には軍港として栄えた町である。そして港町としての役割を終えてからは共に漁村へと変化する。

ポルトフィーノは、19世紀後半になると上流中産階級が別荘地として目をつけたことから漁村から高級リゾート地へと変化し、今日に至っている。ともに天然な入り江を持ち、港町として栄えた日本とヨーロッパ（イタリア）の港町を見ることによって、港町としての特徴や港町の現状を考察する.

地形と宗教施設からみた2つの港町

真鶴（神奈川県）

portofino（イタリア北部）

2つの港町ともに、天然の同じ形をした入江を持ち、入江を挟んで北・西・南部が山に囲われて東側が海へとつながっている。その中で斜面地に人々が暮らしを営み港町が0形成された。

港町は三方を山に囲まれた斜面地のうち、船が海から入江に入って正面にあたる北西部に置かれている。その港町から入江を挟んだ対岸である南東部には宗教施設（真鶴：貴船神社、ポルトフィーノ：S.Giorgio教会）がともに建立された。貴船神社は889年に置かれた神社で、江戸時代までは貴宮明神とよばれ、海を祀る神として崇められ続け、ポルトフィーノのS.Giorgio教会は1154年に置かれ船乗り達の海上安全の象徴として信仰された。

2つの宗教施設は、海とともに発展した港町らしく海と結びついた信仰であることと、港町の中に置かれているのではなく港町から離れた場所にあり、ともにほぼ同じ位置関係にある。港町と海と結びついた宗教施設の関係を見ていく上で、東・西洋を問わず共通した特徴を理解する上で興味深い。

	海から見た港町の景観	海と関係した宗教施設を港町から見た景観	海と関係した宗教施設から港町を見た景観
真鶴（神奈川県）		貴船神社	
portofino（イタリア北部）		S.Giorgio教会	

乗合船によってつながれている現在のポルトフィーノ

ポルトフィーノを中心とした半径15km以内には、ラパッロ、サンタ・マルゲリータ・リグレなどの大衆的なリゾート地がリヴィエラ海岸沿いに面してあり賑わっている。

ラパッロは古代ローマ時代から人が住み始め中世には港町として繁栄し、サンタ・マルゲリータ・リグレはローマ植民地を起源に持つ古い町である。

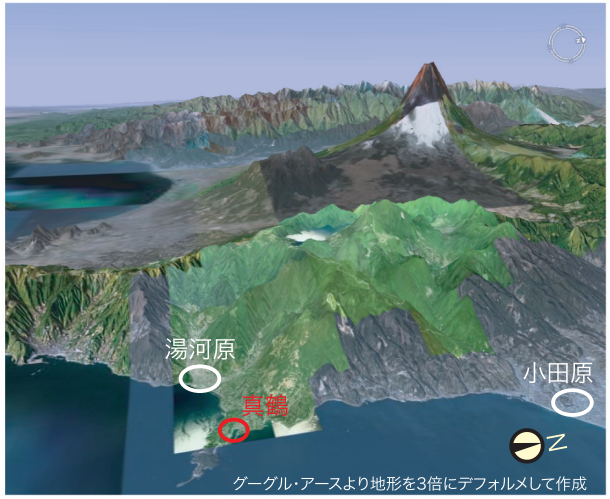
リヴィエラ海岸では、近接したリゾート地を結ぶように乗り合い船が一時間に一本の割合で運航され、船によって結ばれている。

リビィエラ海岸沿いは鉄道で各町へアクセスすることもできるが、真鶴半島と同じように海岸からすぐに急な斜面地が続くため、延々と景色が見えないトンネルを通過して目的地へ到着する。

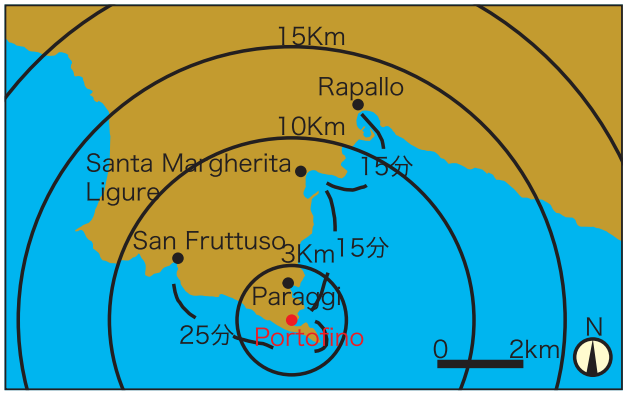
一方、船でのアクセスでは奇麗な海岸沿いの風景を見ながら、各港町へとアプローチをすることができる。

海に面した港町は、舟運で栄えた頃は船からの来客者が多かったため、町の表情も海から入って来たものを出迎えてくれるように造られている。

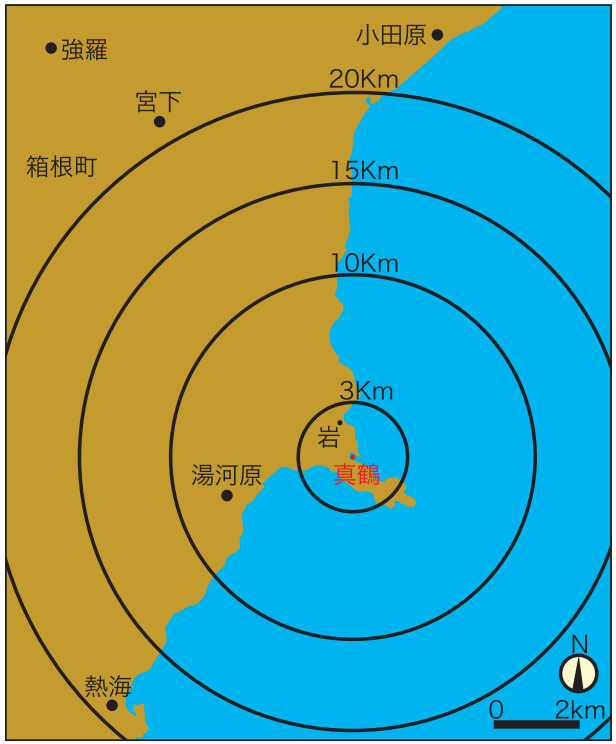
リビィエラ海岸沿いの町と地形



相模湾沿いの町と地形



リヴィエラ海岸沿いの町と船でかかる時間



真鶴と相模湾の町との距離図

乗合船の乗り場（ラパッロ）

一時間おきにでている乗合船

船上風景

船からの景観（サンタ・マリアマルゲリータ・リグレ）

船からの景観（サンタ・マリアマルゲリータ・リグレ）

船の時刻表（ラパッロ）

□ Photo 真鶴の風景

□ Photo 貴船祭り風景 2007.7.27～28

貴船祭

貴船
貴船

おわりに
編集後記
報告書作成メンバー・真鶴商工祭り協力者
参考文献

今日、賑わいのある日本の港町は、函館、小樽、門司、神戸、横浜といった近代以降に繁栄を持ち得た港町が多い。これらの都市は、近代以降に建設された華麗な歴史的建造物や港湾施設が観光客を呼び集め、陸上交通によるアクセスも容易なことから、年中にぎわいをもつ場所となっている。

一方、近代以降に大きな発展から免れた港町は、輸送の主役が舟運から陸運へと移り変わるとともに、次第に時代から取り残されてしまった。真鶴町をはじめ、全国津々浦々の小さな港町がこのタイプにあたる。

だが、このような港町は近代の大規模な開発を受けなかったことが幸いし、現在においても豊かな歴史と自然環境に囲まれた魅力的な町として我々を迎えてくれる。

私の所属する陣内研究室では、現在南イタリアの小さな港町の研究を継続して行っている。南イタリアの港町は、ここ数年で著しい再生の動きがあり、注目を浴びている。数年前まで、歴史地区は近代以降に開発された新市街地へとまちの中心が奪われ、荒廃していた。

だが、ここ数年で再び歴史地区が見直され、人々が歴史地区へと戻り、活気を取り戻したのである。昨年、私は南イタリアにある港町、モノーポリの調査に参加した。モノーポリは、小さな港町にも関わらず、周辺に住む人々が夜になると歴史地区に足を運び、にぎわいのあるまちとして活気を取り戻していた。そこでは、人々が町を徘徊し、レストランで食事を楽しむ光景が深夜まで続いていることに驚きを感じた。

モノーポリをはじめ、イタリアの小都市は、ルーラル・トゥリズムとして「自然の恵み、歴史の豊かさ」が地域再生への最大の財産とすることで、町に活気を取り戻しているのである。

南イタリアで体験した余韻を残しつつ真鶴町を歩くと、モノーポリとこの町が重なって見えてくる。ともに、「自然の恵み、歴史の豊かさ」が溢れた港町だからである。このような港町が見直され、そして再び人々が集まり、町に活気を取り戻すことが 21 世紀に求められている将来像のひとつとしてあるのではないかと実感した。

なお、現地での活動・調査では多くの方のお世話になった。真鶴町まちづくり課の岩本幹彦氏、卜部直也氏、多田英高氏には、商工祭りをはじめ真鶴町での活動に誘って頂き、大変お世話になった。真鶴町まちづくりの会海緑鳥代表の平井宏典氏にも、真鶴町の活動や暮らしについてアドバイスや協力を頂いた。東海大学工学部建築学科加藤仁美教授と加藤研のゼミ生には、商工祭りをはじめ、ヒアリング調査にも誘って頂き、大学間を超えた交流をすることができた。

また、岡本哲志都市建築研究所代表の岡本哲志氏や（株）ケイ・プランナー代表取締役の川端直志氏には、ご多忙の中、現地に来て下さり、調査や再生手法についての貴重なご意見を頂いた。ここに、心からの感謝を申し上げる。

法政大学大学院エコ地域デザイン研究所 RA
日本の港町研究会　副代表
石渡雄士

編集後記

初めて真鶴を訪れた時に感じた潮の香りは今でも鮮明に覚えています。

短い期間の中、気さくで優しく心の底から真鶴を愛する人々との出会い、都心では味わえない豊かな街並みとの遭遇、そうした真鶴の温かさや魅力に触れたことで、何度か訪れる内にいつしかこの街が自分の地元のような存在になっていました。

富永研究室修士１年　宮下幸多

今年の商工祭ができたのも３年前から研究室の先輩が代々、真鶴に通いつめ、真鶴町との交流を絶やさずに人間関係を培ってきたおかげだと思います。

真鶴町役場の方々をはじめ、石材組合の方々の協力、みなとまちづくり協議会の皆様など様々な方々に私たちを受け入れていただき、一緒にまちづくりを考えているからこそ、商工祭で研究発表、提案発表ができたと思います。

そしてこの商工祭がきっかけとなり私たちももっと真鶴の美しさに惹かれ、このプロジェクトに出会えたことに幸せを感じています。これからもこの美しい街に携わっていきたいと思っています。

富永研究室修士１年　今井暢子

年末（12 月 30 日）の強風極寒の中での現地調査はキツかった…。

けど、真鶴の港から町を見渡す景観、高いところから港を見下ろす眺め、好きです。海の幸も最高です！

今年度途中から調査に参加し、歴史調査をするのも、報告書作成に関わるのも初めてのことで、色々教わりながら・勉強しながらの活動でしたが、とても良い経験となりました。

来年度の活動に生かしていきたいと思います。そして今年は貴船祭りもぜひ見に行きたいです！

陣内研究室修士１年　　一原秀

真鶴という小さな町に、こんなにも多くの魅力が詰まっているとは思いませんでした。

初めて訪れた時の印象は、正直閑散とした雰囲気を持つ町だと思いました。ですが、それは真鶴の本質ではなく、貴船祭りの風景が真鶴という場所の本質であり、住民一人一人が持つ町への愛着によって真鶴の町が支えているのだと、今は感じています。

真鶴で関わった方々は、皆さん気さくで良い方ばかりでした。こうした出会いを大切にしつつ、今後も町の方々と一体になって、より美しい町へしていけるよう頑張りたいです。

また、真鶴の美味しい魚料理を食べに行かなくては。

陣内研究室修士１年　佐野友彦

KN3-11739
神奈川 40
丸 園
達弥丸
三菱エンジン

報告書作成者

石渡雄士　（エコ地域デザイン研究所 RA）
今井暢子　（法政大学大学院　富永研究室院生）
宮下幸多　（法政大学大学院　富永研究室院生）
一原　秀　（法政大学大学院　陣内研究室院生）
佐野友彦　（法政大学大学院　陣内研究室院生）

真鶴商工祭り協力者

大島史顕　（法政大学大学院　富永研究室院生）
舘岡静乃　（法政大学大学院　富永研究室院生）
永野尚吾　（法政大学大学院　富永研究室院生）
指田奈津恵（法政大学大学院　富永研究室院生）
池田　賢　（法政大学大学院　富永研究室院生）
葛谷展久　（法政大学大学院　富永研究室院生）
野村裕志　（法政大学大学院　富永研究室院生）
柳澤　隆　（法政大学大学院　富永研究室院生）
清水真由美（法政大学大学院　富永研究室院生）
内山みどり（法政大学大学院　富永研究室院生）
谷森亮祐（法政大学富永研究室）
富田彬夫（法政大学富永研究室）

（所属は 2007 年度を示す）

参考文献

真鶴町　『真鶴町史　通史編』 1993 年

真鶴町　「真鶴町まちづくり条例　美の基準 Design Code」1992 年

五十嵐敬喜ほか　『美の条例　いきづく町をつくる　真鶴町・一万人の選択』 1996 年　学芸出版社

遠藤勢津夫　『真鶴の歴史を語る』 1996 年　門土社

櫻木達夫　『昨日の道　去年の道　大正の写真師が見た小田原・箱根・真鶴・湯河原・熱海』 1999 年　株式会社オールプランナー

川上弘美　『真鶴』 2006 年　文芸春秋

志賀直哉　『小僧の神様・城の崎にて』 2005 年　新潮社

芥川龍之介　『蜘蛛の糸・杜子春』 1984 年　新潮社

下中邦彦　『日本歴史地名大系第十四巻　神奈川県の地名』 1984 年　平凡社

仲田正之編　『街道の日本史 22　伊豆と黒潮の道』 2001 年　吉川弘文館

クリストファー・アレグザンダー　『パタン・ランゲージ　環境設計の手引　町・建物・施工』 1984 年　鹿島出版会

岡本哲志＋日本の港町研究会『港町の近代　門司・小樽・横浜・函館を読む』 2008 年　学芸出版社
歴史学研究会 『港町のトポグラフィ』 2006 年　青木書店
宮本雅明 『都市空間の近世史研究』 2005 年　中央公論美術出版
陣内秀信・岡本哲志編著 『水辺から都市を読む』 2002 年　法政大学出版局
深沢克己 『海港と文明　近世フランスの港町』 2002 年　山川出版社
陣内秀信 『イタリアの水辺風景』 1993 年　プロセスアーキテクチャー
上田　篤 『海辺の聖地－日本人と信仰空間』 1993 年　新潮社
『PORTOFINO AND ITS PROMONTORY』2005,GRAFICHE MILAN CARDS snc,Italy
『RIVIERA LIGURE』1998,officina grafica bolonese,Bologna Italia
古地図研究会 『明治大正日本五万分の一地図集成』 1983 年　学生社
国土地理院地図閲覧サービス　http://watchizu.gsi.go.jp/

法政大学　エコ地域デザイン研究所
所長　工学研究科建設工学専攻　教授　陣内秀信

本研究所は、2004 年に文部科学省学術高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」の採択を受け、法政大学と共同で設立された 5 年間の任期付きの研究所です。

「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することが研究所の目的で、長い歴史のなかで豊かな環境を育みながら、20 世紀に「負の遺産」として扱われた水辺空間を再生し、21 世紀の都市・地域づくりの大きな柱にすることを目指しています。

本研究所の研究体制は、基礎研究を推進する目的で「歴史」、「エコロジー」、「地域マネジメント」、「再生」の四つのプロジェクトから構成されていましたが、2007 年度より具体的なフィールド毎に成果を結集・融合させ、水辺空間の再生ビジョンづくりに取り組めるように、新たな五つのプロジェクトからなる、より実践的な研究体制に改組しました。

本報告書は、そのプロジェクトの中の「港町再生プロジェクト」の成果の一部となります。

真鶴　港町の魅力発見とこれからの展望
発行日　2008 年 3 月 5 日
編集・発行　法政大学大学院エコ地域デザイン研究所
富永譲研究室＋陣内秀信研究室
連絡先　〒184-8584　東京都小金井市梶野町 3-7-2
TEL　042-387 - 6365
e-mail:eco-history@hosei.ac.jp
URL:http://www.eco-history.com
印刷　藤原印刷株式会社